(140) 栃木県今市市穴沢の滝頭鉱山と豊岡鉱山

参考文献(１)には、栃木県今市市にある、銅・鉛・亜鉛鉱床として、小百鉱山に引き続いて、滝頭鉱山と豊岡鉱山が解説されている。この小百鉱山については本探査記で既報である。残りの２つの鉱山については未探査であった。

その理由の第一は、場所がともに、文献（１）の本文中にある文章、「今市市六沢にあり・・・」との記述であった。今市市が現在日光市に吸収合併されているが、地形図、地名辞典などで「六沢」という地名を探しても（これにも結構手間暇がかかっている)、今市市中に「六沢」はないのである。それ故、当初、「六沢」は「六方沢」の間違いではないかと考えた。が、文献の本文中には、「今市駅から北方５ｋｍの高畑から西北方２．５ｋｍの六沢に位置する。」との記述もある。「六方沢」への方向はあっているが、今市駅からは、余りにも遠方である。「六沢」の名を無視して、その当たりをよくよく探してみると「穴沢」という地名を見つけた。「六沢」は「穴沢」の間違いではないかと推断した。いやきっとそうに違いない。が、不安である。

その後、幸運にも、両鉱山のありそうな場所に関する、より正確そうな知見は、参考文献（２）から得ることができた。文献(２)には、小百鉱山について解説している章内で、次のような「豊岡鉱山」に関する記述があった。「豊岡鉱山は小百鉱山の対岸にあり、・・・」。２つの鉱山の間を流れているのは小百川だけである。そして、小百鉱山の対岸は「穴沢」地区である。これにより、文献(１)中の「六沢」は「穴沢」の間違いであると判断した。「六」と「穴」は、酷似している。かつ、好都合であったのは、文献(２)には小百地区を包含した塩谷郡の地質図が掲載されていた。それを見ると、小百鉱山における鉱脈が、小百川を通り抜けて、小百鉱山の対岸である穴沢地区にも延びていることが描かれていたのである。

小百鉱山は既探査である。以上の資料を基に「穴沢」地区に探査に出かけた。その結果、山中を歩き回り、近接する２箇所で、坑口跡、ズリを確認した。豊岡鉱山は、「滝頭鉱山の西北隣鉱区である。」との記述が参考文献（１）にある。これを根拠として、２箇所の鉱山跡の名称を推断したが、確実ではない。なを、両鉱山の鉱山地質は小百鉱山と同じである。

現地への経路は以下の通りである。今市市中からは１２１号に入り、大谷川を渡ってから、２４５号に入る。大笹牧場方面を目指して北上していく。小百地区の十字路交差点から大凡１ｋｍ進むと、左手の田畑中に、低い鳥居が見えてくる。この鳥居の先が現地である。この付近に、「穴沢」のバス停留所を兼ねた、バスの転回地がある（２０１５年の探査時)。片隅にならば、車を止めて置けそうである。

２０１５年　３月探査

図１　国土地理院の地図サービスより複写掲載。上部の赤丸付近は小百鉱山跡。本探査記で既報である。穴沢地区の２箇所、２つの赤丸の所で、鉱山跡を確認した。各々、滝頭鉱山跡と豊岡鉱山跡と推断した。

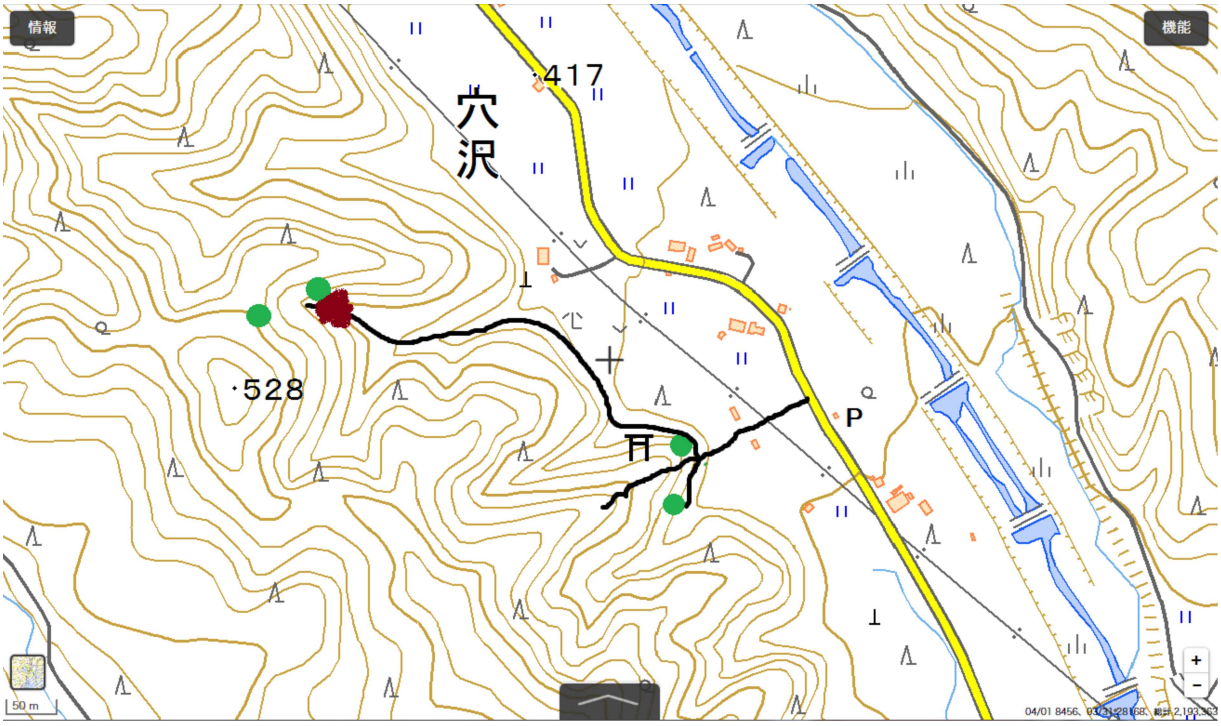

図２　図１の部分拡大図。文字Ｐの所が「穴沢」のバス停留所で、バスの転回地でもある。２４５号からの経路を黒線で書き足している。黄緑丸が坑口跡。茶色ベタがズリ。右は滝頭鉱山跡、左は豊岡鉱山跡と推定。２４５号の道路から、西側の田畑中に鳥居が見える。それに向かって進んでいく。山中に入ると直ぐに、左右に対の灯籠がある。この付近が滝頭鉱山跡。左側に少し進むと、山側に殆ど潰れた坑口跡があり、その下周りは「人工」的なプラトー地形の様に思えた。鉱山施設跡か？
　ついでながら、林道を尾根沿いに登っていくと、社が鎮座している。後掲の写真参照。図中の社の記号の所ではない。豊岡鉱山跡へは、灯籠の所で右側の消えかけている林道を北西側に進んでいく。そのうちに大きな林道に出る。が、沢の所で砂防ダム建設が行われていた（探査時）。工事現場を迂回して、幾つかのダムを乗り越え、上流に登って行く。そのうち沢が２つに分岐する。幾つかの石垣組みのある右側の沢を登り上がる。

鉱山跡写真

滝頭鉱山→豊岡鉱山

写真１　２４５号から見た、鉱山跡への入口。田畑の間に参道があり、先に高さの低い石鳥居がある。

写真２　鳥居をくぐり、林に入ると直ぐに対の石灯籠がある。この間を通り、尾根沿いに登って行くと、社があった。

写真３　灯籠手前で、右側の有るか無いかの林道を少し進むと、左手、つまり山側に岩塊があり、その下に人工的な掘り割りがあった。草木で埋め尽くされている。掘り割りの先は潰れた坑口跡らしい。

写真４　灯籠の手前で、左側に進むと、「人工」的なプラトーとなり、右手、つまり山側に坑口跡らしいものがあった。中央の黒い部分。」

写真５　灯籠の間を通り、小さな赤い社を脇にして、尾根を登った所に、世話の行き届いている大きな社があった。登りの標高差は大凡５０ｍ。

写真６　写真３で示している坑口跡を左手にして、林道を北西方向に進んでいく。と、途中で大きな林道に出る。林道は沢に向かっているが、その先では、砂防ダム建設中であった（２０１５年３月現在)。この沢の先が、次の鉱山跡である。現場を迂回するために、沢に向かって左手の杉林内を登って行く。

写真７　幾つかの砂防ダムを乗り越えた先で、沢は正面と左手の２つに分岐している。正面には、石垣組が２段ほどある。それを乗り越えた先に、ズリ跡があり、坑口跡もあった。写真の中央が坑口跡である。草木で埋もれて殆ど見えないが、坑口の手前には、両側に石垣組がある。坑口の入口に築かれている場合がある石組みである。

写真８　写真７で示した坑口跡の入口付近の内部の様子。立派な坑道が現在でも残っている。

写真９　写真７で示している坑口跡の上方に、もう１つの坑口跡を見つけた。中央の黒い丸部分。

写真１０　その入口付近の内部の様子。

鉱物写真

写真１１　　豊岡鉱山跡で。鉱染状の石塊。赤茶けた転石をハンマーで一撃。破断面に黄鉄鉱らしい微結晶が散らばっていた。

参考文献

（１）「日本地方鉱床誌　関東地方」、今井、河井、宮沢、朝倉書店、昭和４８年(１９７３年)。
（２）「栃木県塩谷郡内金銀銅鉱床調査報告」、高島清、大津秀夫、１９５３年調査、鉱物資源資料Ｎｏ．２２００、地質調査所図書館。